

集落遺跡出土の破碎鏡(I) － 愛媛県内出土の弥生時代破碎鏡を中心に－

石貫弘泰

はじめに

「破鏡」・「破碎鏡」について興味をもつ契機となったのは、Franz Boas氏とGeorge Hunt氏による北米インディアンKwakiutlのポトラッヂにかんする著作(Franz Boas and George Hunt 1895)を読んだことである。彼らの著作のなかに、Kwakiutl社会にはCopper Plate(図1)と呼ばれる銅板があり、それを破壊する行為についての報告があった。Kwakiutl社会ではCopper Plateを破碎する行為に意味があり、破碎したCopper Plateを故意に廃棄することである。つまり、Franz Boasたちが観察したKwakiutl社会では、Copper Plateを保有することよりも、故意に破碎することに重点が置かれていたといえる。中沢新一氏によると、Copper Plateがしばしば破碎され、破碎されることによって、その価値が増殖すると考えられていたという。また、首長の威信を高めるために細かく破碎したCopper Plateを海へ投げ捨てる場合もあるという(中沢2003)。投げ捨てられたCopper Plateはあとで拾い集められ、作り直されることであるが、破碎することが目的の一つとなっている点は注目に値する。

このようなKwakiutl社会の事例を弥生時代社会の破鏡・破碎鏡にそのまま適応するということではないのだが、たとえば鏡の破断面の観察や出土地点の分析によって、弥生時代社会においてもKwakiutl社会の破碎したCopper Plateのように鏡を破碎すること自体が目的の一つとなっていた地域が存在していると推定することも可能ではないだろうか。

今現在の研究史においても、なぜ割れているのかについての明確な答えがなく、破鏡・破碎鏡は北部九州地域を除くと集落からの出土が目立つことから考えると、蓋然性の高い論証さえできれば、Kwakiutl社会のCopper Plateのように「鏡を破碎し、廃棄すること」に重点を置いていたという考え方もある。

なお、本稿では研究史において意味を付加された「破鏡」という用語は用いずに、人が意図的に「破碎した鏡」という意味で「破碎鏡」という言葉を用いることにする。



※縮尺は任意

図1 Kwakiutl 社会の Copper Plate

1. 研究史と観察の視点

(1) 研究史

鏡片にかんする研究 まずは鏡片についての研究史をまとめてみたい。高倉洋彰氏は鏡について一種の権威の象徴であると考え、鏡片の副葬は旧甕棺墓地域から周辺地域首長層への舶載鏡の供給量の不足から始まったとした(高倉1976)。下條信行氏も一枚の鏡で数枚の鏡の用を果たせる目的で鏡を分割したと考え、弥生時代後期後半には「舶載完形鏡→舶載分割鏡→仿製鏡」といった階梯が生じていたと述べている。さらに、墳墓副葬の破碎鏡は集団墓の一つから出土することが多いことから破碎鏡の保持者の社会的地位は限定されたものであったとした(下條1983)。田崎博之氏は、鏡は保有者層相互の政治的結合関係の表象であり、舶載鏡の分割は鏡保有層の拡大に伴った需要の増加にたいし、後漢末期の鏡の流入が停滞したことから鏡の分割がおこなわれたという見解を示した(田崎1984)。これらの見解に共通するのは、鏡の需要にたいする供給が不足していたことから鏡を分割したことである。

これにたいし、森貞次郎氏は、破碎鏡は舶載されてから破碎されたものではなく、スクラップの状態で舶載されたと考え(森1985)、高橋徹氏もまた、列島内において完形鏡を破碎し、その破片を配布したという考え方方は、完形鏡のもつ価値や破碎鏡同士が接合する鏡片の事例がみられないことから、破碎鏡は最初から破片として舶載されたと述べている。さらに、破碎鏡を墳墓に副葬する習慣のない地域では、最終的に居住する集落内の堅穴建物などに廃棄されたとした(高橋1992)。それから、藤丸詔八郎氏は1993年時点でも北部九州だけでも80例近くの鏡片が出土しているにもかかわらず、同じ鏡と特定できる鏡片が見つかっていないことから、完形鏡を破碎することで增量して、分配したという論説に疑問を呈している(藤丸1993)。これらの見解は、そもそも列島内では分割していないという点で共通している。

破碎鏡の発生理由についての見解は大きく二つにわかれていたが、辻田淳一郎氏は完形鏡の分割配布と破片の状態で舶載したのちに配布の両方の見解ともあるうるとし、各地域間のヨコのつながりを基本とする贈与交換の所産というあらたな見解を提示した(辻田2001)。

集落出土の破碎鏡にかんする研究 武末純一氏は弥生時代には「生活の場」、「墓の場」、「埋納の場」の三つの場があるとし、その場における青銅器のあり方を検討し、弥生時代後期には完形の中国鏡と中広形・広形の青銅武器が全く共伴せず、別々の体系を作っているとし、完形の中国鏡は「漢の権威の象徴」であり、首長層の専制的政治権力と直接結びつくのに対し、埋納された青銅武器はこうした権力の発生による共同体内部において新たに創出された共同体のための祭祀の道具であったとした。鏡片については、「墓の場」と「生活の場」の両方にみられることから、完形の中国鏡ほど厳格には扱われず、それほど価値もなく、かなり多義的な性格をもっていたとした(武末1990)。また分布の状況から、北部九州の中心地帯では副葬品としての出土が多いが、そこから遠ざかるにつれて集落出土例が増えることを指摘し、この現象については単なる文化の違いだけではなく、鏡を集落祭祀の道具として用いた「近畿・瀬戸内の習俗の波及」という可能性があるのではないかと述べている(武末1991)。

破碎鏡の観察と分類にかんする研究 森岡秀人氏は破鏡を部位により6つに分け、部位による

選択性が認められないため、無差別な選択がおこなわれたと考えた(森岡1994)。辻田淳一郎氏は鉢の有無と破片の形状の組合せで分類をおこなっている(2005)。南健太郎氏は破碎鏡を鉢の有無でI型(無)、II型(有)に分け、それぞれ穿孔のあるもの(A類)、無いもの(B類)に細分し、さらに利用部位によってa類(内区のみのもの)、b類(内区から外区までのもの)、c類(外区のみのもの)に分けた。それに加えて、破断面の状態によっても破断面A～Cと分類している(南2019、図2)。

(2) 本稿の課題

まず、破碎鏡はなぜ割れているのかについては、船載後に破碎したという見解と割れたものが船載したという見解の二者があり、結論はでていない。筆者は後者の立場をとり、はじめにでも触れたように、破碎することに意味をもっていたとして論を展開したい。また、集落出土の意味については「共同体の祭祀具」としての役割を果たしたとの立場で、その見解の論証をおこないたいと考えている。

これらのことと検証する上では、南氏が分類の基準の一つとした破断面の研磨の有無(図2)が一番重要な要素であると考える。その理由は、鏡を破碎する行為そのものに意味があるのか(破断面の磨滅無し)、破碎した鏡鏡を所有することに意味があるのか(破断面全面磨滅)、それともその両方に意味があるのかといったことを検証するもっとも的確な要素といえるからだ。また、この検証は、鏡はなぜ割られたのかという課題や、集落出土の意味に対する答えを導き出す手がかりになるはずである。本稿では上記の課題をもとにして、破碎鏡の分布や出土情報、破断面の観察などから検討をおこなっていく。

2. 日本列島出土の弥生時代の破碎鏡

弥生時代の日本列島では、北部九州を中心に多くの破碎鏡が出土している(図3、出土数に関しては、下垣2016を用いた)。出土数を県別にみると、福岡県の出土例(93点)が目立つ。次に多い例が大分県(32点)、佐賀県(30点)、熊本県(28点)であることから、福岡県は2番目に多い大分県のおよそ3倍の出土量となる。なお、列島内での破碎鏡は314点あり、福岡県はこのうちおよそ30%を占める。以上のように、破碎鏡の出土量を県別に概観すると、福岡県が圧倒的に多いことがうかが

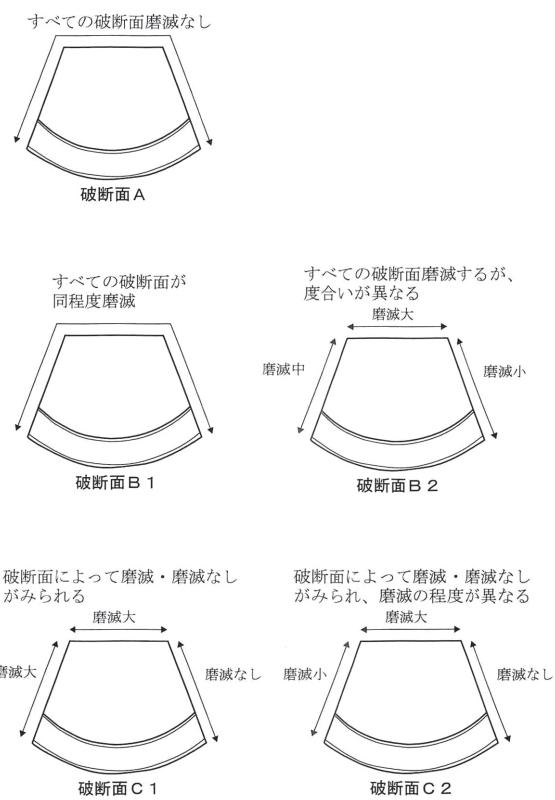


図2 南氏による破断面の分類
(南2019、pp167、図86)

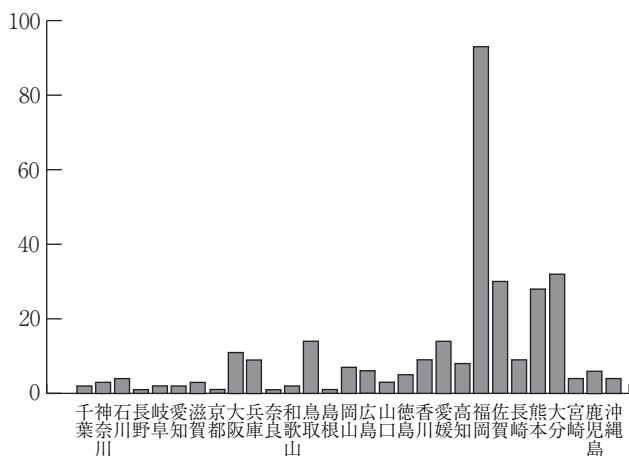


図3 日本列島出土の破碎鏡

合が多くなる。また、北部九州から離れた地域をみてみると、広島県、鳥取県、愛媛県、高知県、大阪府、石川県などでは集落出土の破鏡の割合が高くなるというより、むしろ墳墓からの出土が稀な事例となる。

鏡の供給源が北部九州であることは揺るがない事実ではあるのだが、北部九州とそれ以外の地域では出土遺構が大きく異なっていることを考えると、鏡を受容した社会の内部において、鏡の利用目的が北部九州社会とは異なっていた可能性もありうる。たとえば、破碎するという行為自体が目的だとした場合、「権威の象徴」(高倉1976)や北部九州を中心とした「鏡社会」(田崎1995)のヒエラルキーという各地域間の政治的な結束という解釈よりも、「「生活の場」でのマツリに用いられた祭具」(武末1991)、「共同体の祭祀品」(高橋1979)のような各地域内での結束の道具として用いられたといった解釈のほうが妥当性が高いように感じる。

集落における破碎鏡の出土点数を県別に色で塗り分けたのが、図5である。分布域の中心は福岡・大分・熊本であるが、福岡を供給源としてみた場合、①瀬戸内では大分を起点とした愛媛・香川

える。

そのいっぽうで、集落出土という視点からみると、福岡県(27点)、大分県(26点)、熊本県(25点)、佐賀県(15点)とつづくが、上位3県の差がなくなる(図4)。このように比較した場合、破碎鏡の出土量に違いがみられることがわかる。たとえば、福岡県の場合は集落と墳墓での出土量の割合が1:3で墳墓の出土点数が優位であるのにたいし、他県では、佐賀県と長崎県がほぼ1:1と出土量が同じになり、大分県と熊本県では前者が5:1、後者が4:1と集落出土の割

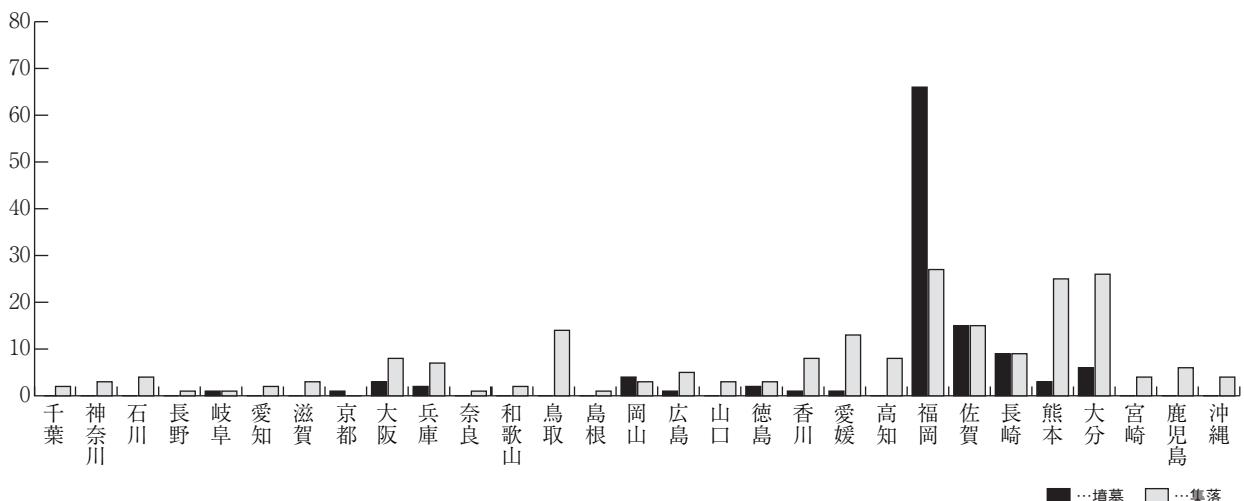


図4 集落出土と墳墓出土の比較

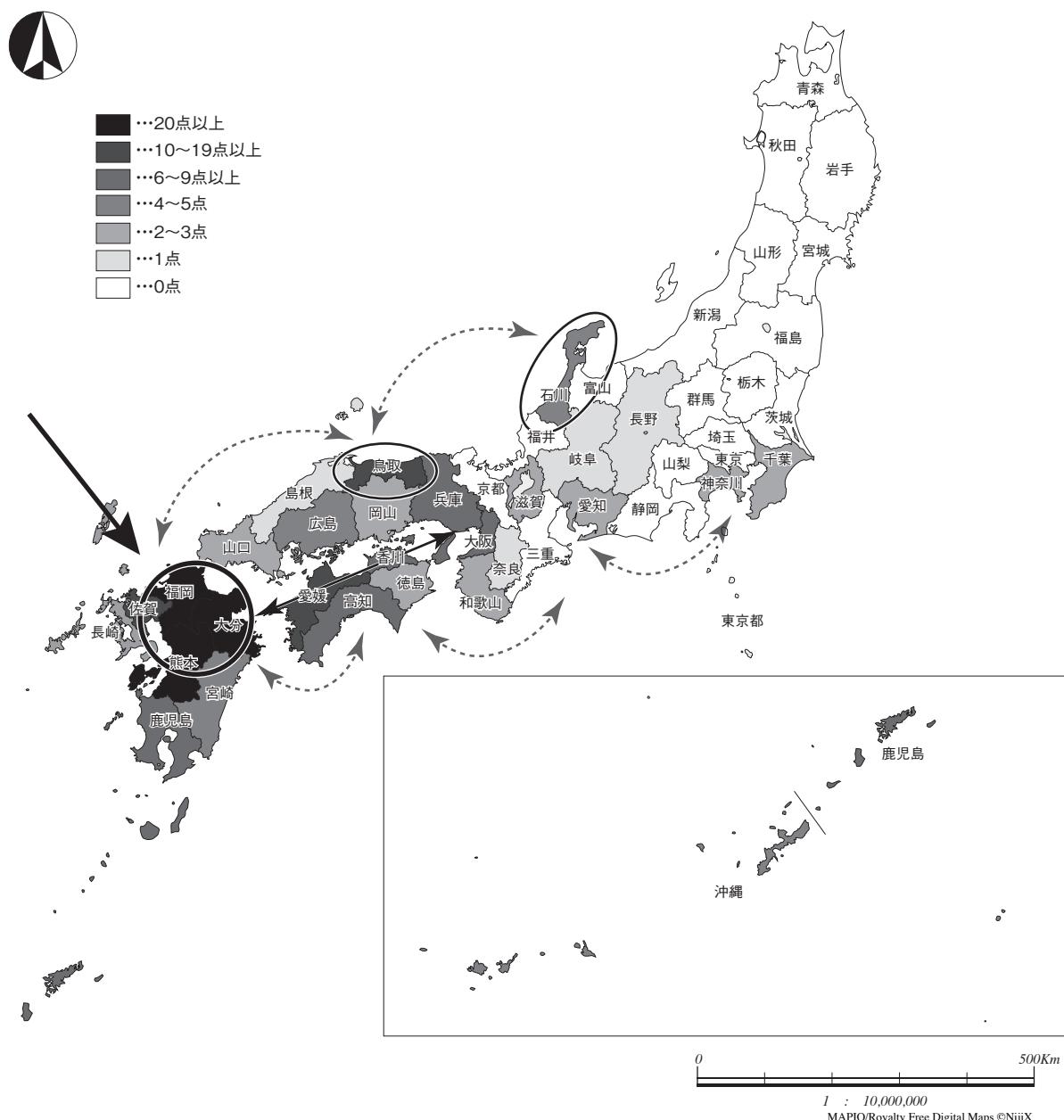


図5 集落出土の破碎した鏡

から兵庫・大阪へという流れ、②大分を起点とした太平洋側の高知への流れが読みとれる。日本海側は鳥取が圧倒的な出土量を誇り、より北部九州に近い島根を飛び越えて流入した様相がうかがえる。さらにその先の石川でも飛び石のように分布している。これは、③福岡を起点とした日本海沿岸地域への流入といえる。これらの様相を、大雑把ではあるが大分・愛媛・香川の中央構造線ルート、大分・高知・和歌山・愛知・千葉の太平洋ルート、福岡・鳥取・石川の日本海ルートといった破碎鏡の3つのルートに分けたい。実際にこの3つのルートが破碎鏡を通じたネットワークとして機能していたのかについての検証はできていないが、たとえば、福永伸哉氏が高知県において弥生時代後期には北部九州系の広形銅矛と畿内系の突線鉗式銅鐸が対峙するように分

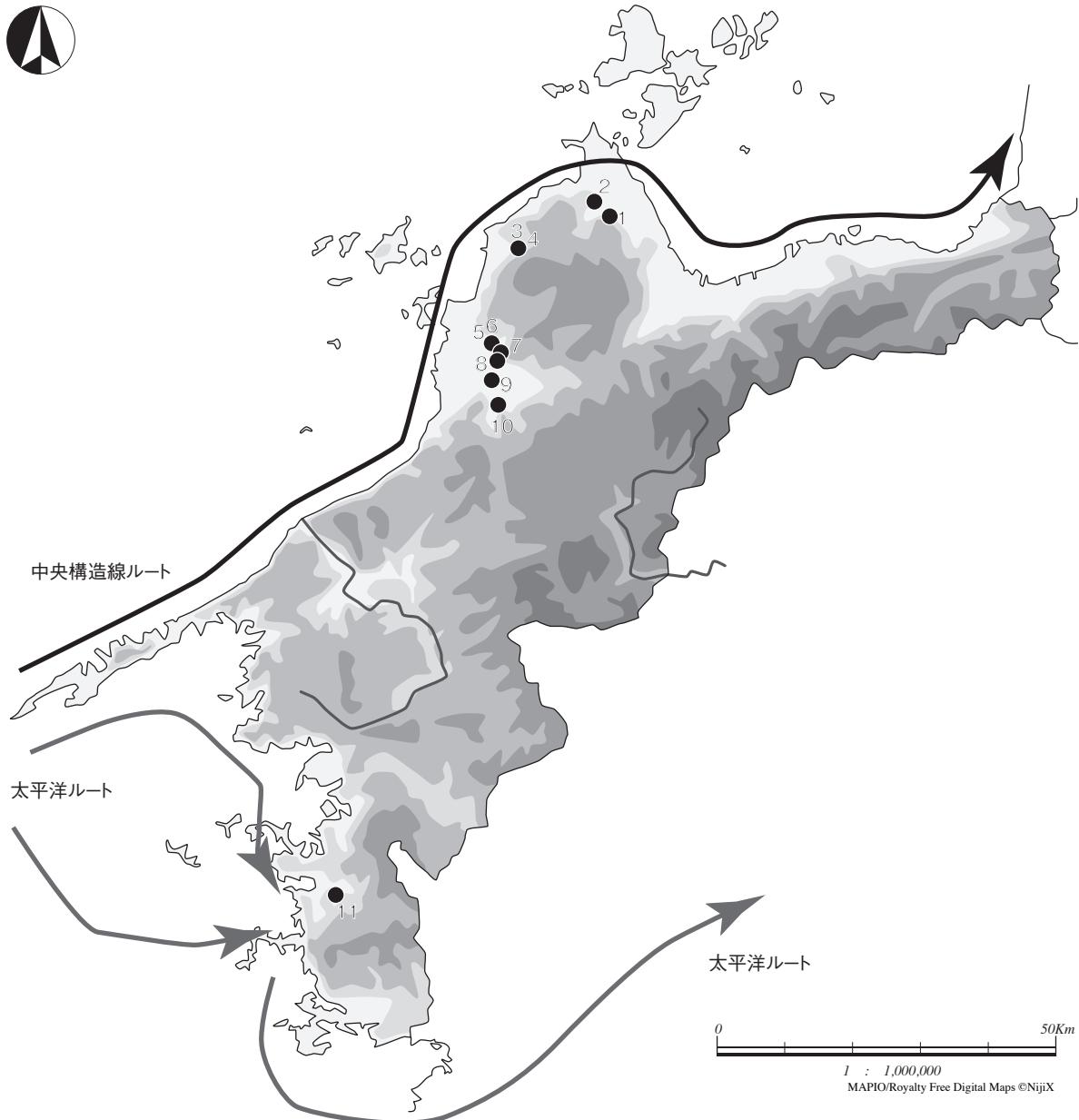


図6 愛媛県における破碎鏡の分布

1:新谷森ノ前遺跡2次 2:高橋湯ノ窪遺跡1次 3・4:大相院遺跡 5:文京遺跡10次 6:文京遺跡24次 7:東本遺跡 8:金ノ口遺跡
9:北井門遺跡 10:水満田遺跡 11:坪栗遺跡

布する点から高知県を起点とする物流が列島各地の集団において大きな意味をもっていたとし、弥生時代後期社会における太平洋ルートの重要性を述べた(福永2006)。福永氏によって実証されたように、破碎鏡の分布状況を地域ごとにみていくことで、破碎鏡流通の3つのルートの存在やその役割についても明らかにできるのではないかと考えている。

愛媛県内における破碎鏡の分布(図6)をみてみると、松山平野に分布の中心はあるものの北条平野、今治平野と中央構造線ルート上に破碎鏡出土遺跡が点在する状況がうかがえる。高橋湯ノ窪遺跡や新谷森ノ前遺跡は今治平野を流れる蒼社川の左岸と右岸地域に位置する拠点的な集落であ

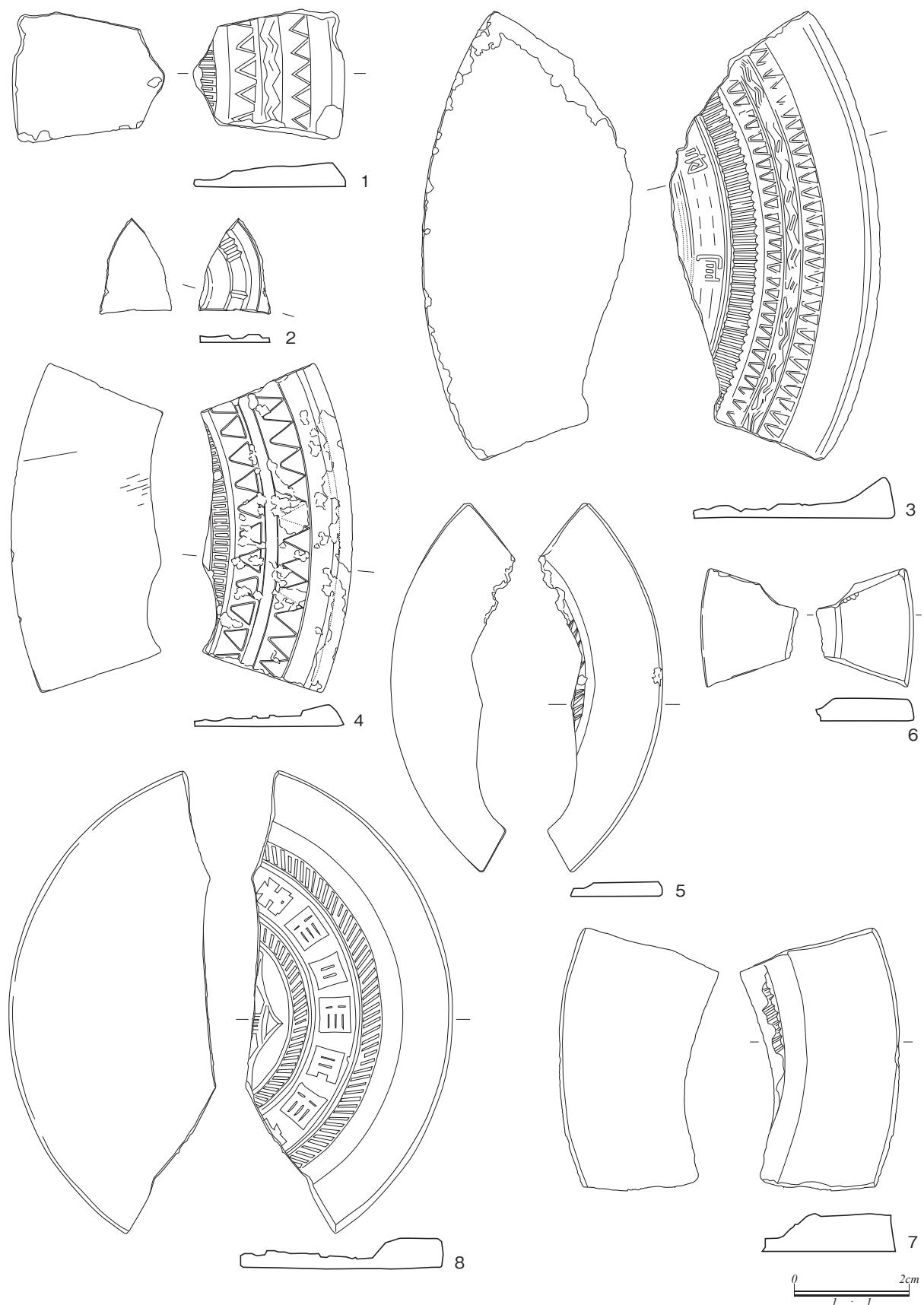


図7 愛媛県内出土の破碎鏡

1:高橋湯ノ窪遺跡 2・3:大相院遺跡 4:東本遺跡4次 5:釜ノ口遺跡8次 6:北井門遺跡 7:水満田遺跡7次 8:坪栗遺跡

り、ルート上の重要な集落であったといえる。西条市以東の地域では破碎鏡の出土事例はないが、県をまたぐと香川には破碎鏡が多量に出土した旧練兵場遺跡があり、ルート上に拠点的な集落が点在する様相がみられる。また、西予市の坪栗遺跡は高知県へつながる太平洋ルート上の遺跡である。

とはいものの、これらの遺跡の有機的なつながりを検証することは容易ではなく、今後の課題である。次章以降では、破碎鏡の観察および各遺跡の評価をおこなう。

3. 観察と分析

愛媛県内の破碎鏡の出土事例は11遺跡13点(表1・図6)であるが、今回、実見できた資料は7遺跡8点(図7)である。以下では、先述した視点に基づいた観察と分析をおこなってみたい。観察は肉眼観察と写真観察によっておこなったが、北井門鏡についてはマイクロスコープ(Dino-Lite Premier)による観察をおこなった。他の7点についてはマイクロスコープを用いていないため、精度は落ちるが、北井門鏡の状態を参考にしながら破断面の状態を判断した。

(1) 破断面の観察(図8～図11)

高橋湯ノ窪遺跡出土鏡 破断面は4面ある。側面の2面にはヒンジフラクチャーのような痕跡が確認できるため、破碎したままの状態を比較的良好に保っているといえる(図8-1)。また、その他の2面についても破断面の角に丸みはみられず、断面も破碎したままの形状を保っていることから、4面とも摩滅の痕跡はみられないと判断した(図8-2、3、4)。

大相院遺跡出土鏡1 破断面は3面ある。側面の1面に摩滅の痕跡がみられる(図8-5)。図8-6の面は摩滅の痕跡はみられず、破碎したままの状態を保っている。図8-7と8は鏡背面と鏡面の両側から撮影した写真である。図8-5に比べると、摩滅の痕跡は顕著ではないが、両方の断面の角がやや丸みをもつたため摩滅と判断した。ただし、図8-5の矢印で示した部分を観察すると、図8-5の断面は図8-6、7の断面に切られていることがわかる。このことは、3つの破断面それぞれが形成された時期、すなわち破碎した時期が異なっていた可能性を示している。これは、破碎鏡の廃棄の役割を考えるうえでも重要なことである。

大相院遺跡出土鏡2 破断面は3面ある(図9-1～4、1と2は同一面)。破断面の摩滅の状況は劣化のため判断しづらいが、破断面の角の状態を詳細に観察すると図9-3と4は比較的良好な角をもっていることがわかる。また、図9-1、2は劣化により状態が悪くなっているが、やはり角をもっている。いずれも摩滅の痕跡はみられない。

束本遺跡出土鏡 破断面は3面ある(図9-5～8)。図9-5と6を観察すると、それぞれ矢印の部分は摩滅しているようにみえる。しかし、側面の角をみると摩滅しているようにみえない。図9-7は図9-6を鏡面側から撮影したものだが、やはり角がしっかりと残っていることがわかる。いっぽうで、図9-8をみると、角が取れ少し丸みを帯びていることがわかる。大相院鏡1の摩滅面(図8-5)と比較すると、摩滅の度合いは軽度であるといえるが、摩滅している部分としている部分の差は確認できる。摩滅している面と部分的に摩滅している面があるといえる。摩滅はすべての面に

みられる。

釜ノ口遺跡出土鏡 破断面は3面ある(図10-1～4)。図10-1と4をみると、破断面の角がとれており、摩滅していることがわかる。図10-2と3は1と4に比べると、角のとれ具合は軽度であるものの、摩滅していると考えられる。したがって、破断面は3面とも摩滅しているといえる。

北井門遺跡出土鏡 破断面は3面ある。3面ともマクロレンズを用いたデジタル一眼レフでの撮影では、3面とも摩滅の痕跡はみられない(図10-5、7、9)。マイクロスコープによる再観察では、しっかりと角が残っていることが確認できる(図10-6と10)。図10-8はいっけんすると、角が取れているようにも見えるが、稜線がしっかりとしていることから判断すると、摩滅の痕跡はみられないとい

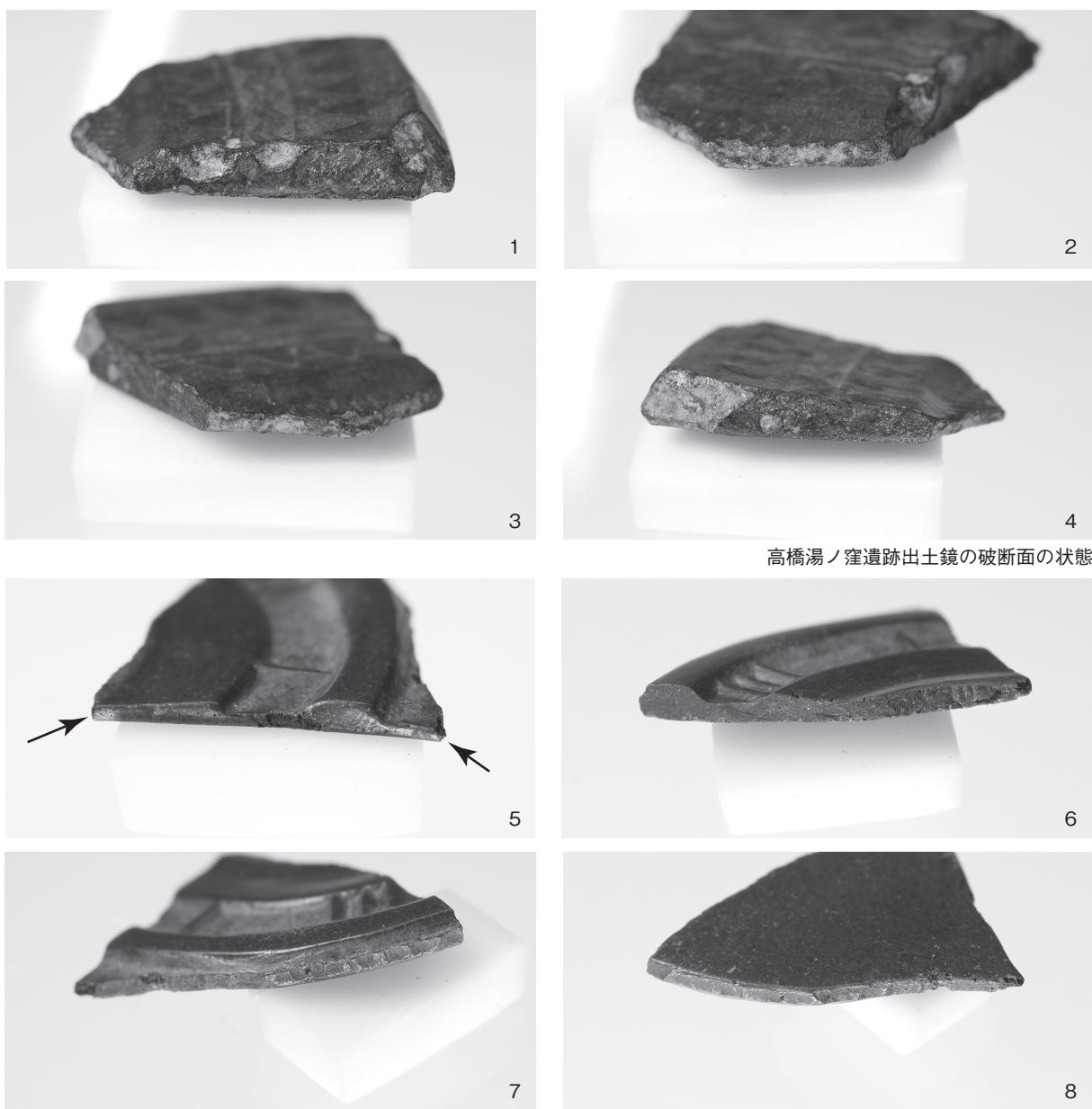


図8 破断面の状態1

える。マイクロスコープを用いた観察は肉眼観察と比較して、より実証性の高いものといえる。

水満田遺跡出土鏡 破断面は3面ある(図11-1～4)。3面とも状態が良くない。図11-1と2は破断面が劣化によって層状に薄く剥がれかけているものの、角の稜線は比較的残存していることから、摩滅の痕跡はみられない。また、図11-3と4は同じ断面の鏡背面側と鏡面側の写真であるが、それぞれの角は明瞭に見えることから、摩滅の痕跡はみられないといえる。以上のことから、破断面は3面とも破碎時の形状をたもっていると判断した。

坪栗遺跡出土鏡 破断面は3面ある(図11-5～8)。図12-5と6をみると、破断面の角部分の稜線が明瞭に観察できることから、摩滅の痕跡はみられないと考えられる。また、図12-7をみても、角

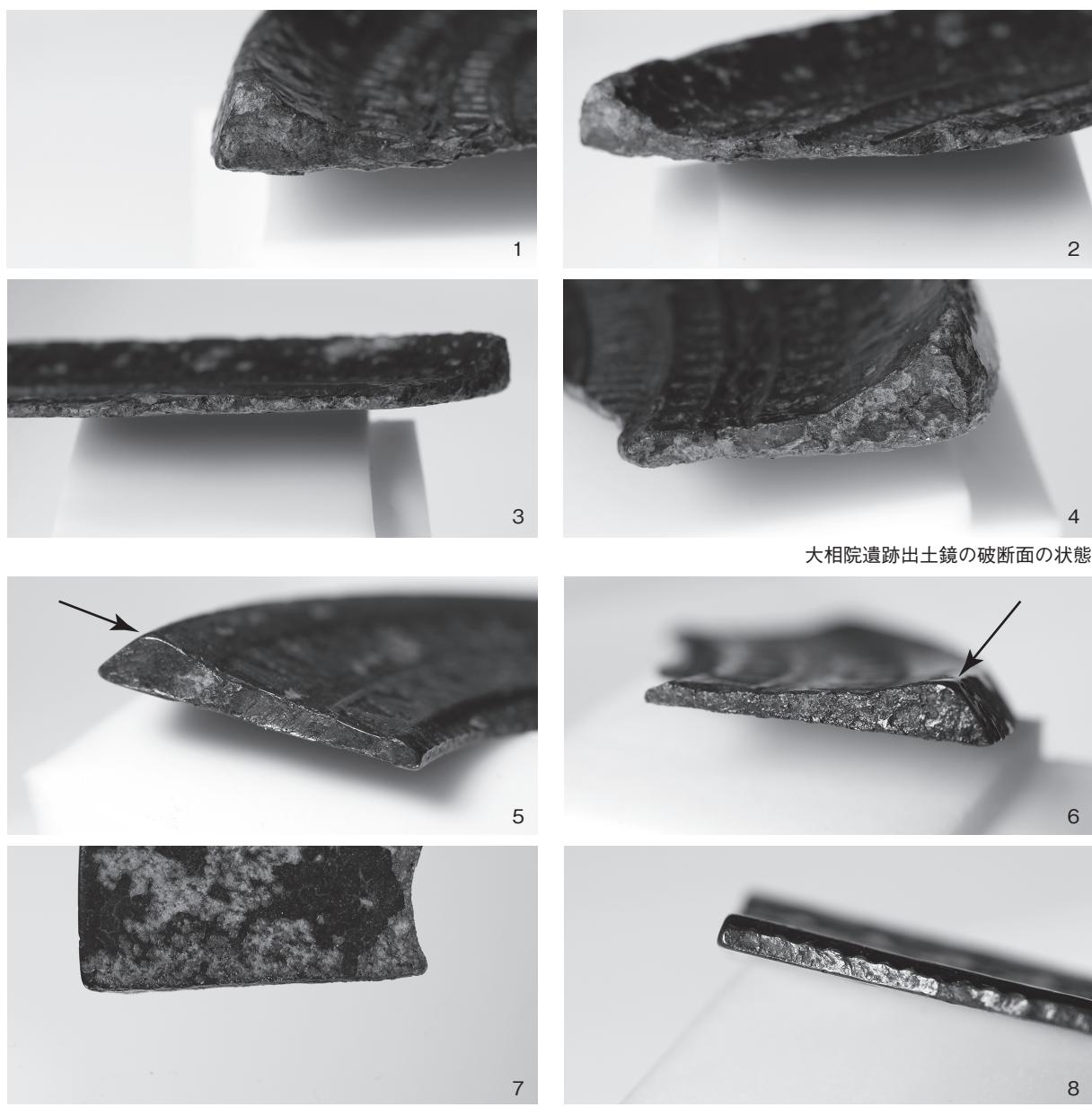
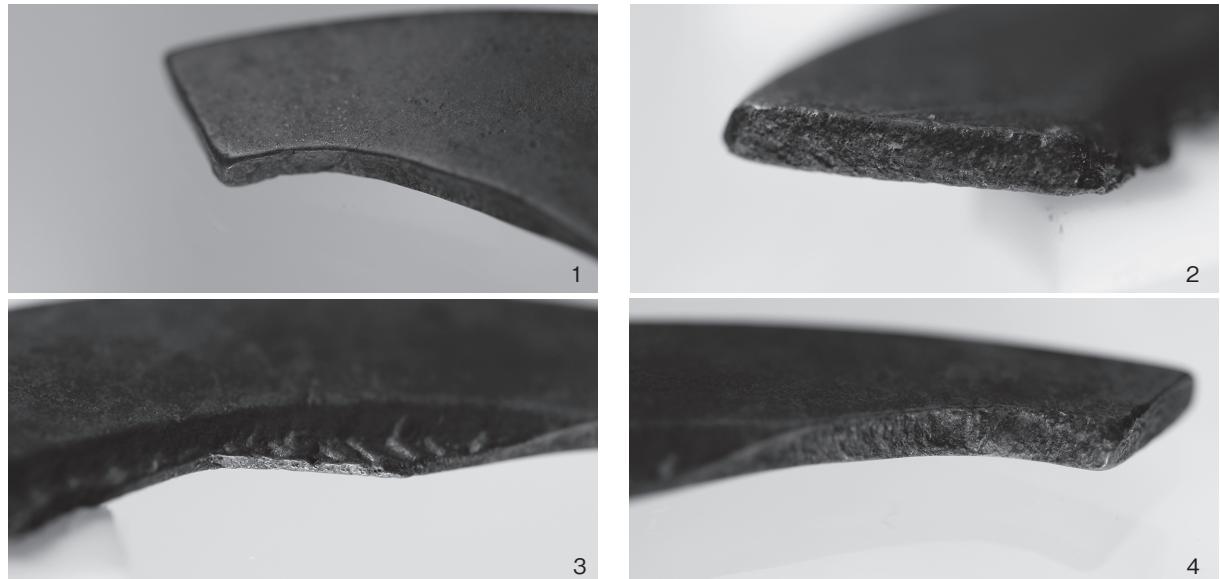
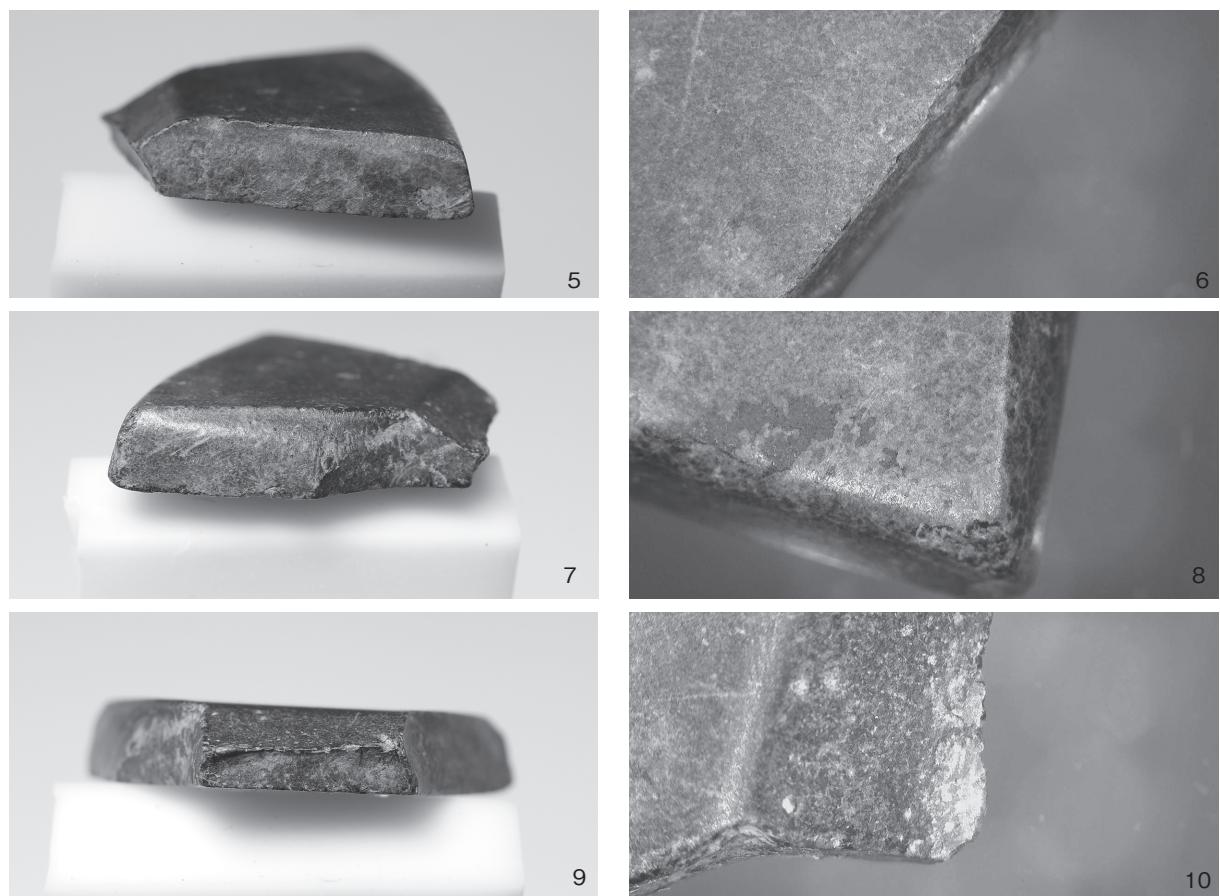


図9 破断面の状態2

はしっかりと稜線をもっていることがわかる。図12-8は6の鏡面側を撮影したもののだが、断面を観察すると、こちらも断面角にしっかりと稜線をもっていることから、破碎した段階の状態を比較的良好に保っていることがわかる。したがって、破断面は3面とも摩滅の痕跡はみられない

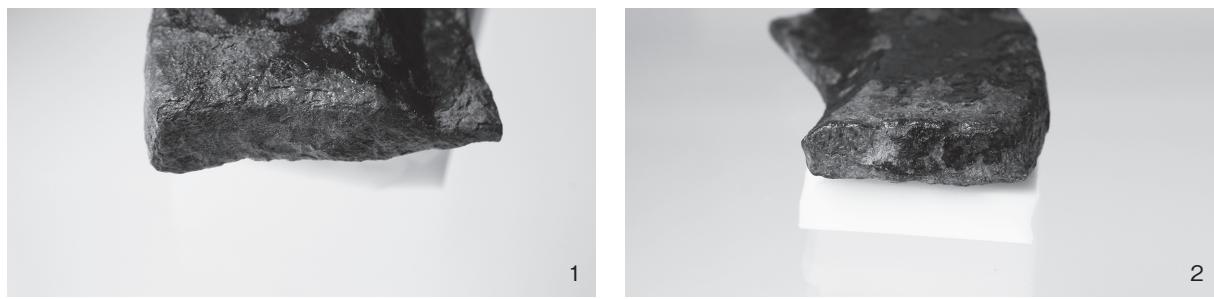


釜ノ口遺跡出土鏡の破断面の状態



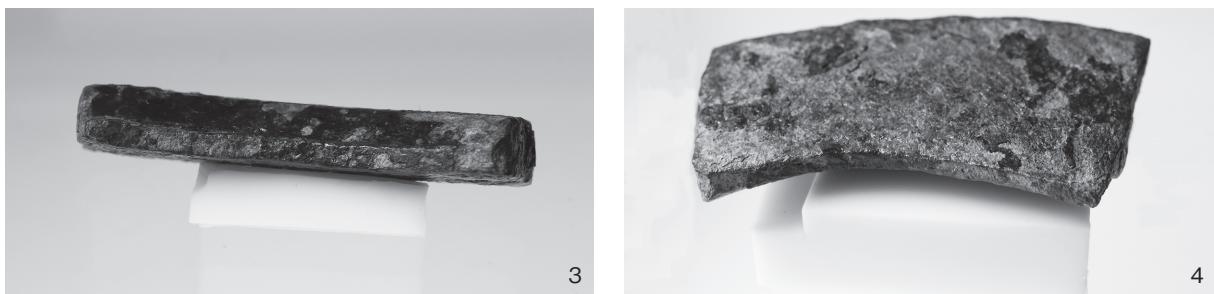
北井門遺跡出土鏡の破断面の状態

図 10 破断面の状態 3



1

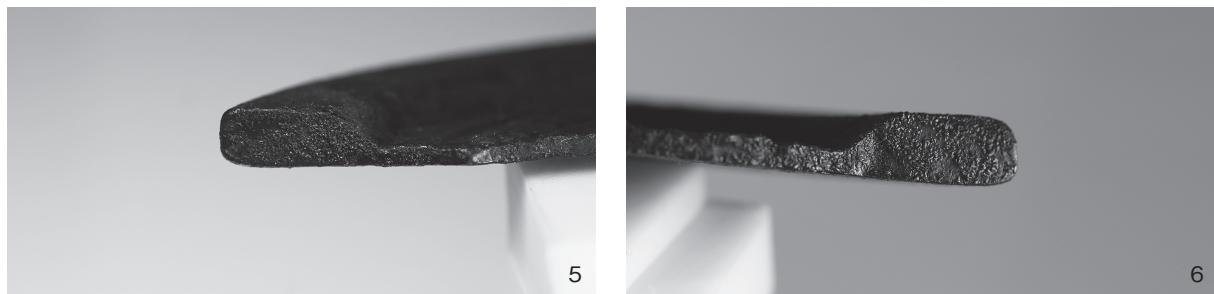
2



3

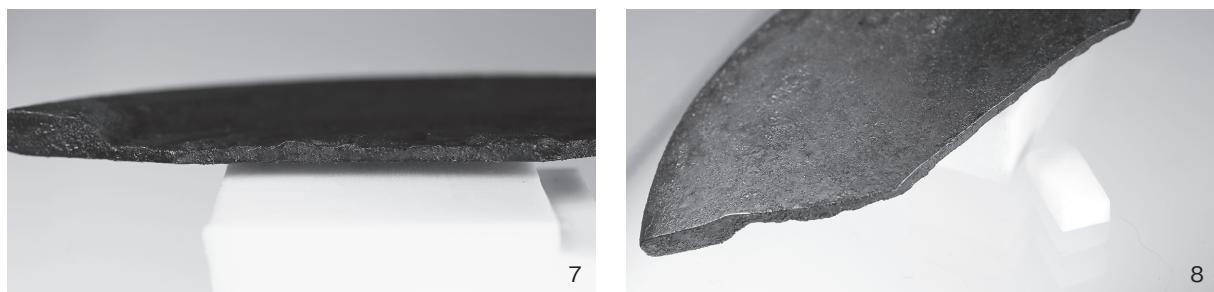
4

水満田遺跡出土鏡の破断面の状態



5

6



7

8

坪栗遺跡出土鏡の破断面の状態

図 11 破断面の状態 4

判断した。

(2) 分析

観察の結果から、愛媛県内出土の破碎鏡はほとんどが破断面の摩滅がおこなわれていない状態であることがわかった。破断面に摩滅がみられる破碎鏡は大相院遺跡鏡1と束本遺跡鏡、釜ノ口遺跡鏡の3面であった。そのうち、大相院遺跡鏡1については、南氏も指摘しているが(南2019)、3面とも摩滅の度合いが違うことを再確認した。そのさい、摩滅のない面は断面の切り合ひ関係から、最後に破碎した面であることがわかった。南氏は摩滅度の違いを破碎鏡それぞれの「ライフ

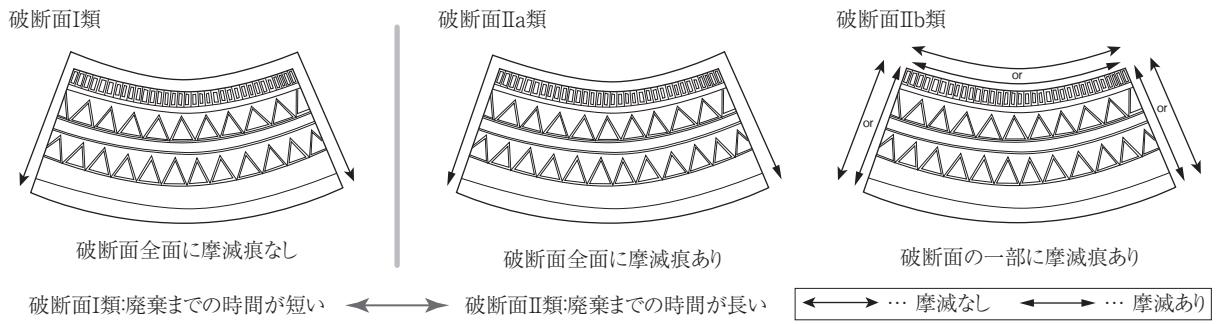


図12 破断面による破碎鏡の分類

ヒストリー」の違いとしてとらえているが、やはり摩滅の痕跡の有無とその程度は、破碎鏡を考えるうえで一番重要な視点といえる。

今回、破碎鏡の分析をするにあたり、南分類の「破断面全てに摩滅痕がない破断面A」を破断面I類とし、「破断面全てに摩滅痕がある破断面B1・B2類」、「破断面の一部に摩滅がないC1・C2類」については、同一の破断面II類とする。南氏の分類をあえて再分類する理由としては、「ライフヒストリー」つまり「廃棄までの過程」が破断面の摩滅の有無によって大きく異なっていると考えられるからである。それは破碎から廃棄までの時間が「短い」か・「長い」か、いいかえれば、「即廃棄」か「一定期間保有後、廃棄」かの違いとしてもとらえられる。以上のことから、破断面I類は廃棄までの時間が短く、破断面II類は廃棄までの時間が長いということを前提として、摩滅の有無で破断面I類・破断面II類と分類する。また、破断面II類については大相院遺跡鏡1の破断面の観察で、摩滅の無い面が破断面の切り合い関係から一番新しい面であることが確認できた。これは、出土時の状態になる以前は破断面すべてが摩滅面をもっていた可能性が高いことを示唆している。南氏も再破碎について述べているが(南2019)、大相院遺跡鏡1は破碎鏡の再破碎がおこなわれたといえ、破断面II類のなかでも廃棄までの過程に違いが生じていることがわかる。したがって、「破断面全てに摩滅のあるもの(南分類:破断面B1・B2類)」を破断面IIa類に、「摩滅のある面とない面をもつもの(南分類:破断面C1・C2類)」を破断面IIb類に再分類した(図12)。

上記の分類をもとに、愛媛県内出土の破碎鏡をみてみると、破断面に摩滅痕のみられない高橋湯ノ窪遺跡鏡・大相院遺跡鏡2・北井門遺跡鏡・水溝田遺跡鏡・坪栗遺跡鏡が破断面I類で、3面とも摩滅痕のある東本遺跡鏡と釜ノ口遺跡鏡が破断面IIa類、2面に摩滅痕をもち、1面が摩滅痕をもたない大相院遺跡鏡1が破断面IIb類となる。愛媛県内の破碎鏡は廃棄までの過程が比較的短い破断面I類が多い結果となった。破断面IIa類の東本遺跡鏡と釜ノ口遺跡鏡では前者が堅穴建物、後者が溝といった違いがみられ、廃棄のあり様が破断面IIa類内で異なっていたのかもしれない。

ここで注目したいのが、大相院遺跡鏡1である(破断面IIb類)。破断面の摩滅度合いがすべての面で異なっている点、廃棄段階では小破片になっている点が特筆される。このことからは、遺跡内での再破碎の可能性も考えられ、破碎鏡の役割を考えるうえでも重要な鏡といえる。それは、破碎鏡の再破碎であれば、鏡自体を破碎することが大きな意味をもっていたと考える証拠にな

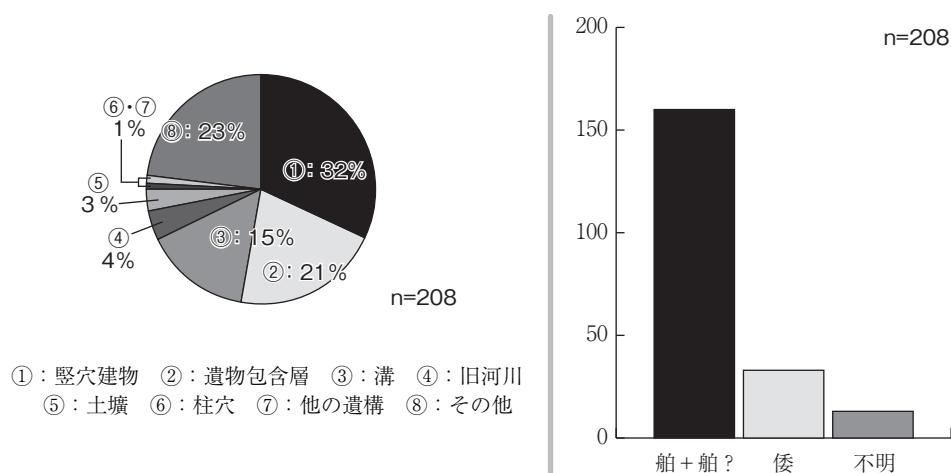


図 13 集落内での破碎鏡の出土位置と鏡の製作地

碎鏡について論じることにしたい。

4. 破碎鏡の集落での様相

(1) 日本列島内の破碎鏡の出土位置と鏡の製作地(図13)

ここでは、列島内の集落における破碎鏡の出土位置についてみてみる。出土した破碎鏡は208点である。出土位置は壺穴建物¹⁾が32%と一番多い。つづいて遺物包含層が21%、溝が15%、旧河川が4%となる。溝と旧河川を類似する性格と考えた場合、合わせて19%となる。土壌(3%)や柱穴(1%)²⁾は少ない傾向を示す。溝や旧河川から一定量出土したことからは、はじめに述べた

Kwakiutl社会における海に捨てられたCopper Plateのような役割を担っていた可能性も想起される。それを証明するためには、破碎鏡の破断面のあり方がポイントとなる。これについては実際に破碎鏡の断面観察をおこなうことでしか解決できない。今回は愛媛県内ののみの様相であるが、第3節で若干の検討をおこなってみる。

なお、破碎した鏡の製作地を概観すると、船載

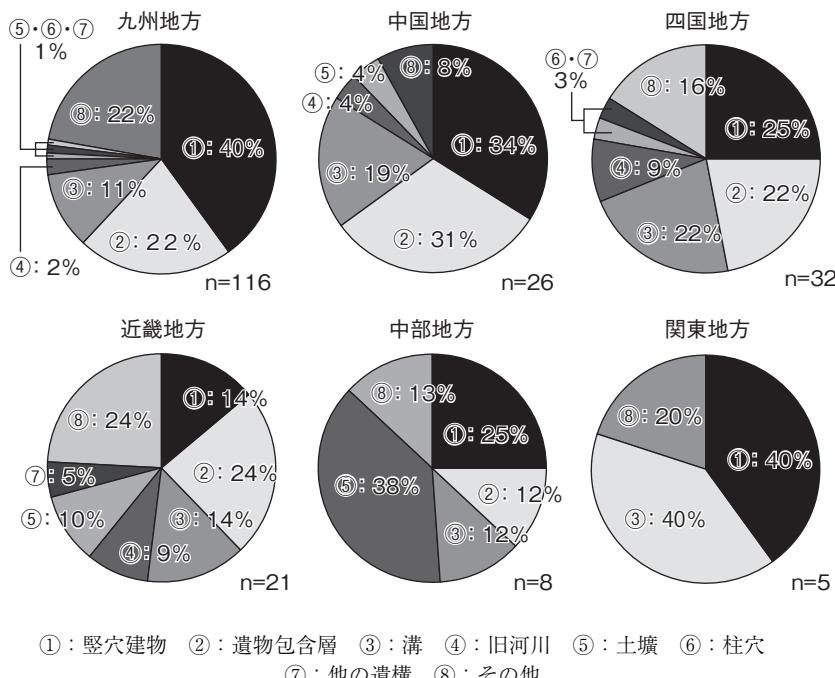


図 14 各地方の破碎した鏡の出土位置

鏡は倭製鏡の3倍以上であり、圧倒的に多い。これは舶載鏡を求めた結果であるといえる。

(2) 各地の様相

まず、九州地方では堅穴建物からの出土が40%と多い。溝は11%、旧河川は2%、土壙・柱穴が1%である。中国地方では堅穴建物が34%、溝が19%、旧河川と土壙が4%で、溝から出土する割合が多くなる。四国地方では堅穴建物が25%、溝が22%、旧河川が9%、柱穴が3%で、堅穴建物と溝との割合が似通った値になる。近畿地方では堅穴建物14%、溝14%、旧河川9%、土壙10%と旧河川の割合が増え、堅穴建物と溝が同じ割合になる。

中部地方では堅穴建物25%、溝12%、土壙38%となり、土壙の割合が一番多くなる。関東地方では堅穴建物40%、溝40%である。以上、各地方別に破碎鏡の出土位置についてみてみたが、どの地方においても堅穴建物と溝からは一定量出土していることがわかる。九州地方では堅穴建物からの出土が多い。中国、四国、近畿では堅穴建物と溝との出土割合がほぼ同等で、中部地方では堅穴建物の割合が溝の倍になり、土壙の割合が大きくなる。このように地方によって最終的な廃棄の場所が異なっている状況がうかがえる(図14)。

つづいて、鏡の製作地の違い(図15)についてであるが、九州地方から四国地方にかけては舶載鏡が倭製鏡の4倍以上を占めており、舶載鏡を意図的に受容していたと考えられる。近畿地方から中部地方にかけては破碎鏡の出土数がそもそも少なく、舶載鏡と倭製鏡の割合はおよそ3:1であり、地理的に舶載鏡の受容が難しかったことに起因するのかは不明である。関東地方になると、舶載鏡は今のところ発見されておらず、破碎鏡の枚数も少ない。列島全体の傾向としては、舶載鏡の割合が高いといえ、舶載鏡を破碎することに意義をみいだしていたといえる。

(3) 愛媛県内での出土状況と破碎鏡の断面の状態(図16)

愛媛県内では堅穴建物が8%で、溝が23%、旧河川が15%、柱穴が8%と、溝と旧河川の割合が高い。今回実見した鏡については、東本鏡が堅穴建物、釜ノ口鏡・大相院2鏡・坪栗鏡が溝、北井門鏡と大相院1鏡が旧河川、高橋湯ノ窪鏡と水満田鏡が遺物包含層という状況である。

堅穴建物から出土した東本鏡は、破断面の全てに摩滅痕がみられる破断面IIa類である。破碎してから廃棄までの時間が長いことや堅穴建物の床

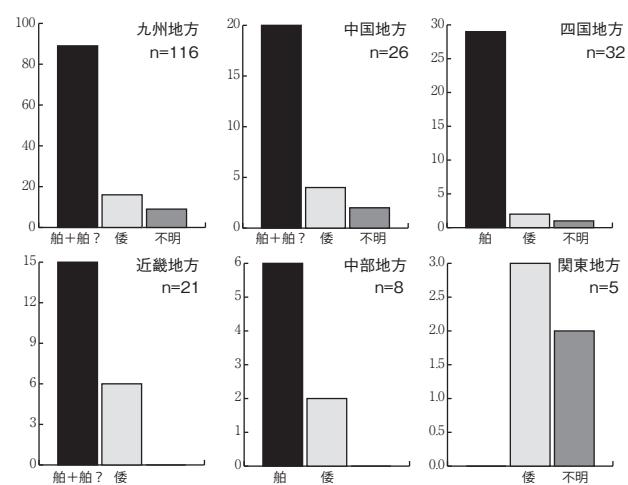
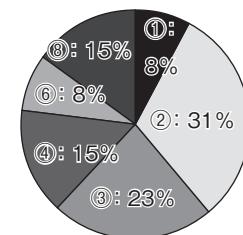


図 15 各地域の製作地別出土状況



①：堅穴建物 ②：遺物包含層 ③：溝 ④：旧河川
⑤：土壙 ⑥：柱穴 ⑦：他の遺構 ⑧：その他

図 16 愛媛県内における破碎鏡の出土位置

直面上からの出土であることから、竪穴建物の廃絶に伴って破碎鏡も役割を終え、廃棄されたと考えられる。筆者はガラス小玉を用いた竪穴建物の廃絶儀礼について論じたことがあるが(石貫2019)、竪穴建物の廃絶と破碎鏡の廃棄にも通ずるものがあるのかもしれない。溝出土鏡では釜ノ口鏡がすべての破断面に摩滅痕がみられる破断面Ⅱa類であるのにたいし、大相院鏡2と坪栗鏡は、すべての破断面に摩滅痕がみられない破断面Ⅰ類である。旧河川出土鏡では大相院鏡1は3つの破断面のうち2面に摩滅がみられ、破断面Ⅱb類である。北井門鏡は摩滅がみられない破断面Ⅰ類であった。溝と旧河川では破断面の種類が異なっている。同種の遺構であっても廃棄までの過程に違いがみられる点は注目される。包含層出土では高橋湯ノ窪鏡、水満田鏡とともに破断面に摩滅はみられない破断面Ⅰ類であった。包含層出土遺物は列島規模でみた場合、全体の22%と竪穴建物につづいて2番目に多い。

このように、愛媛県内においては竪穴建物からは破断面Ⅱa類、溝や旧河川からは破断面Ⅰ類とⅡb類、遺物包含層からは破断面Ⅰ類が出土していることが確認できた。県内事例のみの観察であるため、現在の段階では類例化はできない。

5. 破碎鏡からみた弥生時代後期の社会構造にかんする予察

以上、列島内での破碎鏡の分布の状況や出土遺構の割合、愛媛県内出土の破碎鏡の破断面の状態などをみてきた。今後、列島内出土の破碎鏡の破断面を詳細に観察することで、破碎鏡を破碎し、集落内で出土する理由について明らかにできると予想している。この章では、集落出土の破碎鏡からみた弥生時代後期の社会構造について予察的に考えてみたい。

まず、破碎鏡の流通については、破碎されたものが船載されたという考え方(森1985、高橋1992)と完形品として船載したあとで破碎されたという考え方(高倉1976、田崎1984)の二つの考え方がある。どこから入手したかが第一義的なものであるとすれば、鏡を受容する側にとって大陸からの入手時に完形の状態であろうと破片の状態であろうと同じであると考えられる。より重要な点は、「権威の象徴」(高倉1976)や「保有者相互の政治的結合関係の象徴」(田崎1984)であるのか、それとも「集落祭祀の道具」(武末1990・1991)や「共同体の祭祀品」(高橋1979)であるのかといった、鏡そのものの意義についてである。

近年、三好玄氏がFeinman氏やBlanton氏らのデュアルプロセス理論を援用し、弥生時代社会と古墳時代社会についてその構造を検討しているが(三好2013)、筆者はこの理論は弥生時代後期の破碎鏡を考えるうえで参考になるのではないかと考える。Blanton氏らが提示したデュアルプロセス理論は、排他的で個人志向の政治戦略であるネットワーク型戦略と集団志向の政治戦略である共同型戦略という二つの戦略を元にした理論である(Blanton et al 1996)³⁾。三好氏は弥生時代中期後半までの社会を共同型戦略によって維持されてきたとし、後期中葉頃から庄内式期にかけてネットワーク型の社会へと再編されていくとした。デュアルプロセス理論で注目したいのは、共同型戦略が優位な社会においてもネットワーク型戦略の属性も存在しているということである(Feinman et al 2000)。この共同型-ネットワーク型戦略にもとづけば、弥生時代社会において、どちらかの戦略が優位ではあるが、もう片方の戦略も合わせもつという理解ができるのではない

だろうか。それを弥生時代後期社会に当てはめると、ネットワーク型戦略と共同型戦略の同時併存型といえる。具体的には、破鏡の分布する地域は鏡の入手自体はネットワーク型戦略によって地域集落にもたらされ、使用形態は地域集落内の共同型戦略によるものであったという考え方である。実はこれは従来から論じられてきたことであり、たとえば、田崎氏のいう「鏡に託された広域での政治的関係が形成」(田崎1995)されることがまさにネットワーク型戦略による鏡の獲得であり、武末氏のいう「集落祭祀の道具」(武末1990・1991)として共同体の規制のもとに使用されたものという考えが、共同型戦略による集落内での使用である。

田崎氏の意図とは少しずれるが、受容側の破碎鏡は完形のまま入手し、受容地で破碎したと考えたい。その理由としては、破碎鏡は集落に廃棄されることが圧倒的に多く、たとえ墳墓からの出土であっても、集団墓から出土する傾向が強いため、その保持者の社会的地位は限定されていたとしてきされたとおり(下條1983)、鏡を副葬する地域の周縁に位置する地域では、個人の突出はみらないからである。これが権威の象徴であれば、たとえ破碎鏡であったとしても集落内で出土することはないであろうし、突出した個人に帰属するはずである。したがって、破碎鏡は受容側で、権威の象徴としてではなく、集落祭祀の道具として破碎したと考えられるのである。

おわりに

今回の論考では、破碎鏡の観察は愛媛県内資料に限られているが、破断面の詳細や出土状況の検討はできた。今後、各地の資料の観察と出土状況の検討を積み重ねていき、破片同士の接合資料が見つからない理由や、第5章で述べた予察について、より具体的に検証したい。なお、デュアルプロセス理論はより細かな地域単位でみていくことによって、弥生時代後期社会の複雑さ(物資の流通や小地域の社会構造など)を理解しやすくなるのではないかと考えている。

(2020年9月25日)

謝辞

本稿をなすにあたり、下記の方々や関係機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。
(敬称略、五十音順)

青木聰志、石貫睦子、梅木謙一、小野隼弥、小玉亜紀子、児玉洋志、白石聰、高木邦宏、富田尚夫、中村美琴、乗松真也、原口耕一郎、早瀬航、深江龍哉、松本茂、宮本直美、持永壯志朗、山口莉歩、吉岡和哉、渡邊芳貴

註

- 1)竪穴建物からの出土といつても、床面直上、柱穴内、土坑内、埋土中では廃棄にいたる過程も異なると考えられる。この点についてはより慎重な議論が必要と考えられるため、ここでの具体的な検討はおこなわない。別稿にて検討する予定である。
- 2)柱穴については、古代の柱穴であったとしても、コンタミの可能性があるため、その評価をおこなうことは厳密には難しい。
- 3)これらのに論については乗松真也氏や山口莉歩氏からご教示いただいたことをもとにしている。事実誤認など

があれば、筆者の理解不足ということでご容赦いただきたい。今後、理解を深めて破碎鏡からみた弥生時代の社会像が描ければと考えている。

引用・参考文献

- 石貫弘泰2019「弥生時代後期における堅穴建物に伴うガラス小玉の意義－石手川流域のガラス小玉出土堅穴建物の事例から－」『紀要愛媛』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要 第15号 pp.1-26
- 下垣人志2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 下條信行1983「北九州」「三世紀の考古学」下巻 三世紀の日本列島 學生社 pp.171-204
- 高倉洋彰1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館 pp.1-23
- 高倉洋彰1993「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、pp.3-38
- 高倉洋彰1995『金印国家群の時代 東アジア世界と弥生社会』青木書店
- 高橋徹1979「破棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会 pp.63-88
- 高橋徹1992「鏡」『菅生台地と周辺の遺跡X V』大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告書 pp.327-351
- 高橋徹1994「桜馬場遺跡および井原鑓溝遺跡の研究－国産青銅器、出土中国鏡の型式学的検討をふまえて－」『古文化談叢』第32集 九州古文化研究会 pp.53-99
- 田崎博之1984「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』121 pp.181-218
- 田崎博之1995「瀬戸内における弥生時代社会と交流－土器と鏡を中心として－」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流6 名著出版 pp.29-59
- 武末純一1990「墓の青銅器、マツリの青銅器－弥生時代北九州例の形式化－」『古文化談叢』第22集 九州古文化研究会 pp.47-55
- 武末純一1991「集落と鏡」『弥生古鏡を掘る－北九州の国々と文化－』北九州市立考古博物館 第9回特別展 pp.44-46
- 中沢新一2003「純粹贈与する神」『愛と経済のロゴス』カイエ・ソバージュ3 講談社選書メチエ pp.54-72
- 辻田淳一郎2001「古墳開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』第46集 九州古文化研究会 pp.53-91
- 辻田淳一郎2005「破鏡の伝世と副葬－穿孔事例の観察から－」『史淵』142 pp.1-39
- 辻田淳一郎2007『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎 pp.87-163
- 福永伸哉2010「青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系 pp.55-70
- 藤丸詔八郎1991「北九州市内出土の鏡について」『高津尾遺跡4(16区の調査)』北九州市埋蔵文化財調査報告第102集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 pp.212-232
- 藤丸詔八郎1993「破鏡の出現に関する一考察－北部九州を中心に－」『古文化談叢』第30集(上) 九州古文化研究会 pp.87-115
- 藤丸詔八郎2000「後漢鏡について」『古墳発生期前後の社会像－北部九州及びその周辺地域の地域相と諸問題－』古文化研究会第100回例会記念シンポジウム 九州古文化研究会 pp.170-190
- 藤丸詔八郎2011「破鏡の謎」『歴史読本』2011年4月号 pp.206-213
- 南健太郎2019『東アジアの銅鏡と弥生社会』同成社 pp.158-179
- 三好玄2013「集落から見た古墳時代成立過程」『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』発表要旨集 考古学研究会関西例会30周年記念シンポジウム 考古学研究会関西例会 pp.11-22

- 森岡秀人1994「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題－』第35回埋蔵文化財研究集会 別冊 埋蔵文化財研究集会 pp.41-50
- 森貞次郎1985「弥生時代の東アジアと日本」『稻と青銅と鉄』日本書籍 pp.237-256
- Blanton,R Feinman,G Kowalewski,S and Peregrine,P 1996 "A Dual-Processual Theory for the Evolution of Mesoamerican Civilization" Current Anthropology Volume 37 pp.1-14
- Feinman,G Lightfoot,K and Upham,S 2000 "Political Hierarchies and Organizational Strategies in the Puebloan Southwest" American Antiquity Vol.65 pp.449-470
- Franz Boas and George Hunt 1895 "The social organization and the secret societies of the Kwakiutl Indians" Report of U. S. National Museum pp.341-358

挿図出典

図1 Franz Boas and George Hunt 1895より転載。図2 南健太郎2019より転載。図3～6 筆者作成。図7 1：今治市教育委員会、2：愛媛県教育委員会、3：愛媛県教育委員会、4：松山市考古館、5：松山市考古館、6：愛媛県教育委員会、7：砥部町教育委員会、8：西予市教育委員会。図8 1～4：今治市教育委員会、5～8：愛媛県教育委員会。図9 1～4：愛媛県教育委員会、5～8：松山市考古館。図10 1～4：松山市考古館、5～10：愛媛県教育委員会。図11 1～4：砥部町教育委員会、5～8：西予市教育委員会。図12～16 筆者作成。

表1 日本列島出土の破碎した鏡一覧（弥生時代）

No.	県名	出土遺跡	地区・遺構記号	舶	倭	鏡式	遺跡内容	出土地点	備考	時期
1	千葉	請西遺跡群・野焼A遺跡	SD008		?	不明	集落	溝		不明
2	千葉	御林跡遺跡			?	不明	集落	溝		弥生末期
3	神奈川	大場第二地区遺跡群	No.2地区YT-10住居跡		倭	弥生和製鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
4	神奈川	真田・北金目遺跡群	44区 SI0159		倭	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
5	神奈川	真田・北金目遺跡群	遺構外		倭	不明	集落	遺構外		弥生後期～
6	石川	吉崎・次場遺跡	V-8号土壙		舶	キ龍文鏡	集落	土壙		弥生
7	石川	塚崎遺跡	6号堅穴住居跡		倭	不明	集落	堅穴建物		弥生末期
8	石川	古府クルビ遺跡	遺物包含層		倭	不明	集落	遺物包含層		弥生
9	石川	無量寺B遺跡	BII区1号溝		舶	双頭龍文鏡	集落	溝		弥生末期
10	長野	社宮司遺跡			舶	多鋸細文鏡	集落	表採		弥生後～末期
11	岐阜	砂行遺跡	SBE01住居跡		舶	方格規矩四神鏡or細線式獸帶鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
12	愛知	高蔵遺跡	第34次SK44		舶	キ龍文鏡	集落	土壙		弥生後期
13	愛知	朝日遺跡	99Ab区 SK01		舶	キ龍文鏡	集落	土壙		弥生後期～
14	滋賀	上高砂遺跡			舶	方格規矩鏡	不明	遺物包含層		不明
15	滋賀	鶴田遺跡	旧河道最下層		倭	弥生倭製鏡	集落	旧河川		古墳前期
16	滋賀	十里遺跡	大溝101		舶	内行花文鏡	集落	旧河川		弥生末期
17	大阪	東奈良遺跡	小川水路		倭	弥生倭製鏡	集落	溝		不明
18	大阪	東奈良遺跡	大溝SD01		舶	方格規矩鏡	集落	溝		弥生後期～古墳初頭
19	大阪	芥川遺跡	住居跡1溝内		舶	獸文緣方格規矩四神鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
20	大阪	塚原遺跡			舶	流雲文緣鏡	集落	不明		不明
21	大阪	萱振遺跡	第9層		倭	弥生倭製鏡？	集落	遺物包含層		弥生後期
22	大阪	八尾南遺跡			倭	弥生倭製鏡(内行花文鏡)	集落	遺物包含層		弥生後期
23	大阪	瓜破北遺跡			舶	連弧文清白鏡？	集落	遺物包含層		弥生後期
24	大阪	上田町遺跡	SK01 土壙		倭	弥生倭製鏡？	集落	土壙		弥生後期
25	兵庫	北青木遺跡	第3次調査 SK237		倭	素文鏡	集落	土壙		弥生or奈良
26	兵庫	上沢遺跡	第33次調査 井戸SE201底面		舶？	不明	集落	井戸		奈良
27	兵庫	吉田南遺跡	5号住居		舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
28	兵庫	加茂遺跡			舶？	不明	集落	不明		不明
29	兵庫	船木遺跡			舶？	不明	集落	不明		弥生後期
30	兵庫	大中遺跡	7号A住居跡		舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
31	兵庫	鳥居遺跡			舶	不明	散布地	現河床		不明

No.	県名	出土遺跡	地区・遺構記号	船倭	鏡式	遺跡内容	出土地点	備考	時期
32	奈良	清水風遺跡		舶	不明(前漢鏡?)	集落	遺物包含層		弥生中期
33	和歌山	滝ヶ峰遺跡	(薬勝寺遺跡)	舶	キ龍文鏡	高地性集落	表探		弥生後期
34	和歌山	太田黒田遺跡		舶	内行花文鏡	集落	溝		弥生
35	鳥取	秋里遺跡	(西皆竹)SD09	舶	四葉座紐内行花文鏡	集落	溝		弥生後期~
36	鳥取	秋里遺跡		舶	方格規矩鏡	集落	集落		弥生後期
37	鳥取	青谷上寺地遺跡	12次SD33-1 埋土	舶	星雲文鏡	集落	溝		弥生後期~末期
38	鳥取	青谷上寺地遺跡	県道5区1層	舶	八禽鏡	集落	遺物包含層		弥生中期~奈良
39	鳥取	青谷上寺地遺跡	11次SD11埋土上層	舶	八禽鏡	集落	溝		弥生後期
40	鳥取	青谷上寺地遺跡	国道1区1層	倭	重圓文鏡	集落	遺物包含層		弥生後期~奈良
41	鳥取	青谷上寺地遺跡	国道2区1層	舶	内行花文鏡	集落	遺物包含層		弥生後期~古墳初頭
42	鳥取	青谷上寺地遺跡	県道4区2層相当	倭	弥生倭製鏡(四弧内行花文鏡)	集落	遺物包含層		弥生後期~古墳前期
43	鳥取	高原遺跡	10号住居	舶	流雲文縁鏡	集落	堅穴建物	焼失住居	弥生後期
44	鳥取	南谷大山遺跡	B区SI23	舶?	内行花文鏡?	集落	堅穴建物		弥生後期
45	鳥取	妻木晚田遺跡	松尾頭地区SI45	舶	不明(内行花文鏡?)	集落	堅穴建物		弥生後期
46	鳥取	妻木晚田遺跡	松尾城地区SI11	舶	四葉座内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
47	鳥取	福地遺跡	吉塚31号住居跡	倭	不明	集落	堅穴建物	壁際埋土上層	弥生末期~古墳前期
48	鳥取	博労町遺跡	5区包含層	倭	重圓文鏡	集落	遺物包含層		弥生~古代
49	島根	大原遺跡	G13区遺物包含層第4層	舶	不明	集落	遺物包含層		弥生後期
50	岡山	桃山遺跡	2区2層	舶	不明	集落	搅乱層		不明
51	岡山	矢部南向遺跡	44号住居	?	不明	集落	堅穴建物		不明
52	岡山	刑部遺跡		舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
53	広島	京野遺跡	SB35内P6	舶	連弧文銘帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
54	広島	池の内遺跡	第2号住居跡付近	舶	長○子孫八弧内行花文鏡	集落	遺物包含層	堅穴建物付近	弥生後期
55	広島	亀山遺跡	SD5001	舶	不明	集落	溝		弥生後~末期
56	広島	神鍋御領遺跡	E地点SD09	舶	細線式獸帶鏡	集落	溝		弥生後~末期
57	広島	青迫遺跡	2B区包含層	舶	方格規矩四神鏡	集落	遺物包含層		弥生後~末期
58	山口	奥ヶ原遺跡	I地区堅穴建物SB-1	舶	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
59	山口	下東遺跡		舶	内行花文鏡	集落	旧河川		弥生後期~末期
60	山口	柳瀬遺跡	土壤LX007	舶	八弧内行花文鏡	集落	土壤		弥生後期
61	徳島	庄・蔵本遺跡	徳島大学体育館地點ア7区塹壕	舶	不明	集落	搅乱層	近世	
62	徳島	庄・蔵本遺跡	中央診療棟地點	舶	連弧文銘帶鏡	集落	遺物包含層		弥生末期
63	徳島	昼間遺跡	正力地区	舶	内行花文鏡	集落	不明		弥生末期
64	香川	河津中塙遺跡	SH II 02	舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
65	香川	旧練兵場遺跡	S区SH1058床面	舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
66	香川	旧練兵場遺跡	L区遺構面	舶	内行花文鏡	集落	遺物包含層		弥生末期
67	香川	旧練兵場遺跡	II-4区SH4003	舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
68	香川	旧練兵場遺跡	26次SD315 b	舶	方格規矩鏡	集落	溝		古代
69	香川	旧練兵場遺跡	28次SD10	舶	不明	集落	溝		古代
70	香川	旧練兵場遺跡	28次搅乱塙	倭	弥生倭製鏡	集落	搅乱塙		弥生末期
71	香川	彼ノ宗遺跡	ST09	倭	弥生倭製鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
72	愛媛	新谷森ノ前遺跡	2次SP	舶	方格規矩鏡	集落	柱穴		古代
73	愛媛	野々瀬IV遺跡	5次B I-5~6	不明	不明	集落	遺物包含層		弥生後期
74	愛媛	高橋湯ノ窪遺跡	第4層・第5層	舶	不明	集落	遺物包含層		弥生
75	愛媛	文京遺跡	10次	舶	不明	集落	遺物包含層		弥生中期~後期
76	愛媛	文京遺跡	24次SX10	舶	不明	集落	堆積		弥生?
77	愛媛	東本遺跡	4次3区SB302	舶	不明	集落	堅穴建物		弥生後期~末期
78	愛媛	釜ノ口遺跡	8次SD3	舶	内行花文鏡	集落	溝		弥生末期
79	愛媛	北井門遺跡	3次SR1	舶	内行花文鏡	集落	旧河川		弥生後期
80	愛媛	大相院遺跡	5区SR001	舶	前漢鏡	集落	旧河川		弥生後期~末期
81	愛媛	大相院遺跡	6区SD001	舶	上方作系浮彫式獸帶鏡	集落	溝		中世
82	愛媛	古照遺跡	1次	舶	不明	集落	不明		弥生
83	愛媛	水満田遺跡	E12区5層	舶	不明	集落	遺物包含層		弥生末~古墳前期
84	愛媛	坪栗遺跡	SD04	舶	連弧文銘帶鏡	集落	溝		弥生後期
85	高知	北地遺跡	ST1	舶	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
86	高知	田村遺跡	Loc45 ST1	舶	方格規矩四神鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
87	高知	田村遺跡	Loc34B SP1	舶	方格規矩四神鏡	集落	旧河川	(水溜状遺構)	弥生後期
88	高知	田村遺跡	E1 ST102	舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
89	高知	西分増井遺跡	I A区包含層	舶	内行花文鏡	集落	遺物包含層		弥生後期
90	高知	西分増井遺跡	I A区土器集中3	舶	不明	集落	土器集中区		弥生後期
91	高知	馬場末遺跡	II B区SD1検出面	舶	内行花文鏡	集落	溝		古代

No.	県名	出土遺跡	地区・遺構記号	船倭	鏡式	遺跡内容	出土地点	備考	時期
92	高知	介良遺跡	SD1	舶	内行花文鏡	集落	溝		弥生後期
93	福岡	吉井水付遺跡	第五地点 遺物包含層	舶	内行花文鏡？	集落	遺物包含層		弥生後期
94	福岡	吉井水付遺跡	第五地点 遺物包含層	？	不明	集落	遺物包含層		弥生後期
95	福岡	吉井水付遺跡	第五地点 遺物包含層	倭	不明	集落	遺物包含層		弥生後期
96	福岡	三雲遺跡	加賀石地区SI08-E56第3層	舶	方格規矩鏡	集落	遺物包含層		弥生後期～
97	福岡	三雲遺跡	番上地区I-2・3区溝2	舶	不明	集落	溝	(住居に伴う?)	平安末～鎌倉
98	福岡	三雲遺跡	深町-15地区	舶	方格規矩鏡	不明	遺物包含層	(二次堆積層)	弥生～古墳
99	福岡	三雲遺跡	上覚地区	舶	不明	不明	遺物包含層		弥生後期～古墳前期
100	福岡	大塚遺跡	第11次調査SD65東端	舶	内行花文鏡	集落	溝	環壕	弥生後期
101	福岡	今宿五郎江遺跡	第11次	舶	内行花文鏡	集落	遺物包含層		弥生後期
102	福岡	橋本一丁田遺跡	SD020	舶	不明	集落	溝		不明
103	福岡	野多目前田遺跡	第I 調査区第3号溝状遺構	舶	八弧内行花文鏡	集落	溝		中世
104	福岡	那珂遺跡群	第69次SC041	舶	長 子孫八弧内行花文鏡	集落	堅穴住居		弥生後期
105	福岡	那珂遺跡群	第23次SD96	舶？	不明	集落	溝		不明
106	福岡	博多遺跡群	第147次2区4面上包含層	舶	上方作系浮彫式獸帶鏡？	集落	遺物包含層		不明
107	福岡	東平尾大谷遺跡	A区南側斜面	舶	不明	集落	遺物包含層		弥生後期
108	福岡	蒲田水ヶ元遺跡	住居跡柱穴	舶	方格規矩鏡	集落	堅穴建物	柱穴	弥生～古墳
109	福岡	仲島遺跡(51)	7区SK287	舶	不明	集落	土壤		弥生後期～
110	福岡	御笠地区遺跡	F地区70号トレンチ 3号住居跡	舶	蝙蝠座鉗八弧内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
111	福岡	天神ノ木遺跡		舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
112	福岡	須玖唐梨遺跡	調査区西隅第9層	舶	不明	集落	遺物包含層	遺物包含層？	不明
113	福岡	古屋敷遺跡	3号住居跡	？	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
114	福岡	平塚川添遺跡	中央集落	舶	長 子孫八弧内行花文鏡	集落	溝		弥生後期
115	福岡	三沢栗原遺跡	V区30号住居跡	舶	内行花文鏡？	集落	堅穴建物		弥生後期
116	福岡	みくに保育所内遺跡	1号住居跡	舶	方格規矩八禽鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
117	福岡	稻光遺跡	II地区旧河川跡	倭	素文鏡	集落	旧河川		弥生後期
118	福岡	都留遺跡	溝5	舶	方格規矩鏡	集落	溝		弥生後期
119	福岡	小石原遺跡		舶	不明	集落	不明		弥生後期
120	佐賀	町南遺跡	SB103	舶	双頭竜文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
121	佐賀	長ノ原遺跡	4号堅穴住居跡	舶	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
122	佐賀	内精遺跡	6区SH2162 住居跡	倭	弥生倭製鏡(内行花文鏡)	集落	堅穴建物		弥生末期
123	佐賀	吉野ヶ里遺跡	吉野ヶ里地区V区SD0925外環濠跡	舶	内行花文鏡？	集落	溝	環壕	弥生後期
124	佐賀	吉野ヶ里遺跡	吉野ヶ里地区V区SD0829環濠跡	舶	不明	集落	溝	環壕	弥生後～末期
125	佐賀	吉野ヶ里遺跡	志波屋四の坪地区 SH0544	舶	内行花文鏡？	集落	堅穴建物		弥生後～末期？
126	佐賀	憩座遺跡	SD19 溝跡	倭	弥生倭製鏡	集落	溝		弥生末期
127	佐賀	憩座遺跡	SD023 溝跡	？	不明	集落	溝		弥生後期
128	佐賀	岡裏遺跡	6区包含層	？	不明	集落	遺物包含層		弥生～中世
129	佐賀	修理田遺跡	SX2024 不明遺構	舶	不明	集落	不明遺構		弥生後期
130	佐賀	半田大園遺跡	C地区	舶	不明	集落	遺物包含層		不明
131	佐賀	中原遺跡	9-2区 O-27区画包含層	舶	鋸齒文縁方格規矩鏡	集落	包含層		不明
132	佐賀	中原遺跡	12区SH12035	舶？	不明	集落	堅穴建物	埋土	弥生
133	佐賀	みやこ遺跡	VI区下層	舶	キ龍文鏡	集落	不明		弥生
134	佐賀	湯崎東遺跡	E3区SEトレンチ第3層	舶	連弧文銘帶鏡orキ龍文鏡	集落	遺物包含層		弥生末期～古墳前期
135	長崎	カラカミ遺跡	辻屋敷貝塚	舶	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	不明		弥生後期
136	長崎	原の辻遺跡	石田大原地区	舶	多鈕細文鏡	集落	不明		弥生
137	長崎	原の辻遺跡	石田大原地区	舶	キ龍文鏡	集落	不明		弥生
138	長崎	原の辻遺跡		舶	上方作系浮彫式獸帶鏡？	集落	不明		弥生
139	長崎	原の辻遺跡		倭	不明	集落	不明		弥生
140	長崎	原の辻遺跡	大川地区	舶	内行花文鏡？	集落	不明		弥生
141	長崎	原の辻遺跡	高元地区II C区Ⅲb層	舶	連弧文銘帶鏡	集落	遺物包含層		弥生中期
142	長崎	門前遺跡	C-9-23第4層	舶	複波文縁方格規矩鏡？	集落	遺物包含層		弥生
143	長崎	白井川遺跡	F-3区第3層	舶	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	遺物包含層		弥生中～後期
144	熊本	大原遺跡	1区-3号住居跡S13	舶	連弧文清白鏡	集落	堅穴建物		弥生後期～
145	熊本	大原遺跡	2区号住居跡S2	舶	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期～
146	熊本	木船西遺跡		舶	内行花文鏡	集落	不明		弥生後期～
147	熊本	高岡原遺跡	10号住居	？	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
148	熊本	山田松尾平遺跡	3区S25 W30下段遺物包含層	舶	画像鏡or獸帶鏡？	集落	遺物包含層		弥生？
149	熊本	方保田東原遺跡	C-9区	舶	不明	集落	遺物包含層		不明
150	熊本	古閑原遺跡		舶	内行花文鏡	集落	表採	堅穴建物内？	弥生末期
151	熊本	うてな遺跡	III区-10号A遺跡	倭	弥生倭製鏡？	集落	溝		弥生後期

No.	県名	出土遺跡	地区・遺構記号	船倭	鏡式	遺跡内容	出土地点	備考	時期
152	熊本	小野崎遺跡	牟賀塚Ⅲ区SH10	船	内行花文鏡	集落	堅穴建物	弥生	
153	熊本	小野崎遺跡	牟賀塚Ⅲ区SH27	船	方格規矩鏡?	集落	堅穴建物	弥生	
154	熊本	西一丁畠遺跡	遺物包含層第Ⅲ-3a層第21号住居外	船	方格規矩四神鏡	集落	遺物包含層	or堅穴建物	弥生後期
155	熊本	上高橋高田遺跡	O-19グリッドⅢ層最下層	船	飛禽鏡?	集落	遺物包含層		弥生~古墳
156	熊本	上高橋高田遺跡	排水路D-1区IV層	船	不明	集落	溝		弥生~古墳
157	熊本	戸坂遺跡		船	内行花文鏡	集落	不明		弥生
158	熊本	二本木遺跡群	田崎地区6区SI16	船	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
159	熊本	石川遺跡	13区2号住居	倭	弥生倭製鏡(内行花文鏡)	集落	堅穴建物		弥生後期
160	熊本	弓削山尻遺跡		倭	弥生倭製鏡	集落	不明		不明
161	熊本	宮池遺跡群		船	連弧文昭明鏡	集落	不明		弥生後期
162	熊本	二子塚遺跡	4号住居跡	?	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
163	熊本	二子塚遺跡	67号住居跡	船	内行花文鏡?	集落	堅穴建物		弥生後期
164	熊本	二子塚遺跡	86号住居跡	船	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
165	熊本	北中島西原遺跡	住居跡	船	連弧文銘帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後~末期
166	熊本	夏女遺跡	23号住居跡	倭	弥生倭製鏡(内行花文鏡?)	集落	堅穴建物		弥生後期
167	熊本	夏女遺跡	50号住居跡	倭	弥生倭製鏡(十弧? 内行花文鏡)	集落	堅穴建物		弥生後期
168	熊本	本日遺跡	SK12	船	方格規矩四神鏡	集落	不明		弥生後期~古墳
169	大分	上原遺跡		船	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生
170	大分	宮ノ原遺跡	2次調査B-3区北部	船	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	表採		弥生後期~末期
171	大分	宮ノ原遺跡	12号堅穴上部	船	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	表採		不明
172	大分	古城得遺跡	20号住居	船	キ龍文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
173	大分	尼ヶ城遺跡	住居跡	船	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	堅穴建物		弥生
174	大分	守岡遺跡	II区11号住居跡	船	者縁同向式神獸鏡?	集落	堅穴建物		弥生後期~
175	大分	守岡遺跡	II区1号住居跡	船	連弧文銘帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後期~
176	大分	雄城台遺跡	6次8号住居	船	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
177	大分	雄城台遺跡	7次1号住居	船	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
178	大分	地蔵原遺跡		船	連弧文銘帶鏡?	集落	堅穴建物		弥生
179	大分	大道遺跡群	第4次調査	船	方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	遺構外		不明
180	大分	東大道遺跡	B地区	船	不明	集落	近世水田床下部		弥生後期?
181	大分	原遺跡	3号住居跡	船	方格規矩鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
182	大分	高松遺跡	16号住居跡	船	連弧文銘帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
183	大分	高松遺跡	36号住居跡	船	流雲文方格規矩鏡?	集落	堅穴建物		弥生後期
184	大分	二本木遺跡	34号住居跡	?	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
185	大分	松木遺跡	27号住居跡	船	複波文緣方格規矩鏡or獸帶鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
186	大分	穴井南遺跡	1号堅穴住居	船	内行花文鏡	集落	堅穴建物		弥生後~末期
187	大分	高添遺跡	石五道原地区No.56ピット	船	方格規矩鏡	集落	柱穴		弥生後期~古墳前期
188	大分	高添遺跡		倭	弥生倭製鏡	不明	不明		不明
189	大分	小園遺跡	A区4号住居跡	船	方格規矩八禽鏡	集落	堅穴建物		弥生後期
190	大分	石井入口遺跡	75号堅穴住居跡	船	内行花文鏡?	集落	表採		弥生後期
191	大分	石井入口遺跡	56号住居跡	船	不明	集落	表採		弥生後期
192	大分	石井入口遺跡	92号住居跡	船	浮彫式獸帶鏡	集落	表採		弥生後期
193	大分	上城遺跡	9・10号堅穴住居	倭	弥生倭製鏡	集落	堅穴建物	埋土	弥生
194	大分	安国寺遺跡		倭	不明	集落	遺物包含層		弥生後期~古墳前期
195	宮崎	神殿遺跡	A地区10号住居跡	倭	弥生倭製鏡	集落	堅穴建物		弥生末期
196	宮崎	松本原遺跡	24号住居跡	船	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
197	宮崎	銀代ヶ迫遺跡	9号住居	船?	不明	集落	堅穴建物		弥生後期
198	宮崎	下那珂遺跡	96号住居	倭	キ龍文鏡	集落	堅穴建物		弥生後期~末期
199	鹿児島	横瀬遺跡	2号住居跡埋土上層	倭	弥生倭製鏡	集落	堅穴建物	埋土上層	弥生後期
200	鹿児島	不動寺遺跡	H23-4 SR10	船	流雲文緣方格規矩四神鏡	集落	旧河川		不明
201	鹿児島	石上原A遺跡		船	不明	集落	不明		不明
202	鹿児島	本御内遺跡(舞鶴城跡)	F9区遺物包含層	船	方格円文鏡	集落	遺物包含層	堅穴建物付近	弥生後期
203	鹿児島	芝原遺跡		船	不明	集落	不明		弥生末期
204	鹿児島	芝原遺跡		船	内行花文鏡	集落	不明		弥生末期
205	沖縄	宇堅貝塚		船	方格規矩鏡	集落	遺物包含層		弥生中期
206	沖縄	宇堅貝塚		船	不明	集落	不明		
207	沖縄	宇堅貝塚		船	不明	集落	不明		
208	沖縄	浦添城跡	コーグスク地区	船	方格規矩鏡	グスク	遺物包含層		14世紀ごろ

※ 表は下垣 2016 から作成。古墳時代のものについては検討対象としなかったが、それ以外の時期や時期不明のもの、古墳時代前期の遺構から出土した弥生時代倭製鏡についてはデータの中に入れている。

愛媛考古学協会

第24号

令和2(2020)年9月30日

編集・発行 愛媛考古学協会 会長 岡田敏彦
